

# 祇園原古墳群 4

国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書(4)



2 0 0 1

新富町教育委員会

## 序

宮崎県の一つ瀬川流域には数多くの古墳群があることで有名です。そのなかでも本町の祇園原古墳群には宮崎県における古墳時代後期最大の首長墓群があります。

町ではこの重要な史跡を後世にわたって保存するため史跡整備計画を立案し、平成9年度から発掘調査をすすめています。

具体的な整備手法は未定ですが、実施計画の策定に向か数年間の発掘調査を行う予定です。本年度は昨年度から開始した百足塚古墳の発掘調査の4年目になります。すでに調査で検出された大量の形象埴輪は宮崎県で希有な例として高い評価を受けています。

これら多くの出土遺物は今後の史跡整備で活用し、文化財保護の啓発や広く生涯学習の場に寄与させようと考えています。

最後になりましたが、関係者の方々には調査に際して多くのご助言やご協力を頂きました。この場をかりて御礼申し上げます。

平成13年3月

新富町教育委員会

教育長 清 郁雄

## 例　　言

1. 本書は平成12年度に行った宮崎県児湯郡新富町に所在する新田原古墳群の史跡整備におもなう発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は「新田原古墳群記念物保存修理・一般」事業として文化庁の国庫補助金を受け、宮崎県文化課及び新田原古墳群史跡整備専門検討委員の指導のもと、新富町教育委員会がおこなった。
3. 国指定史跡「新田原古墳群」は町内に分布する大字新田地区に点在する古墳の総称で、実際は4つの別個の古墳群と判断できるため、それぞれ塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。今回の整備計画は祇園原古墳群が対象である。
4. 本書の執筆・編集は有馬が行った。
5. 本書で仕様する方位は座標北と磁北である。レベルは海拔絶対高である。
6. 本書で使用した地図のうち、第1図・第2図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに作成し、ほかは平板測量にて作図した。
7. 調査で出土した遺物と作成した図面等はすべて新富町社会教育課で一括保管している。

## 本文目次

I. 位置と概要	
1. 一つ瀬川流域の古墳分布とその特徴	1～4
2. 祇園原古墳群の概要	4
II. 発掘調査の経緯	
1. 整備までの経緯	4～6
2. 短期整備と発掘調査	6
3. 調査経過	6
4. 調査体制	6～8
5. 調査の概要	8～12
III. まとめ	12

# I. 位置と概要

## 1. 一つ瀬川流域の古墳分布とその特徴

### 古墳群の立地

一つ瀬川は九州山地に源をもち、宮崎県のほぼ中心部を北西から南東へ蛇行しつつ、日向灘へ流れ入る二級河川である。その中流域は三納川・三財川等の小河川と合流し、台地の端部に幾つもの開析谷を形成し、広い平野部を有している。特に標高60~130mの洪積台地は長い年月に渡る断続的な隆起と浸食によって形成された広い平坦面で、俗に「~原」と呼ばれることが多い。

この原から沖積平野部にかけての一帯は宮崎県最大の古墳密集地で、高塚墳が約800基確認でき、宮崎県内の古墳総数の約半数に及ぶ。特に前方後円墳は71基にのぼり、県内の前方後円墳総数169基の約4割にある<sup>(1)</sup>。以下では前方後円墳を中心に、墳形と採集される遺物から考えられる古墳の築造時期の概要をまとめる。

### 前期

右岸の西都原台地では少なくとも6つの首長墓系譜が同時期に継続して築造されており、いくつかの集団が墓域を共有していたことが想定されている<sup>(2)</sup>。また左岸の茶臼原古墳群に2基、祇園原古墳群に2基、山之坊古墳群に6基、塚原古墳群に2基、三納川流域の百塚原古墳群に1基、三財川流域の下三財古墳群に5基など、ほとんどの流域・支流域の台地上に首長墓系譜が認められ、宮崎県域最大の密度度が認められる。

しかし、この時期の一つ瀬川流域の系譜には、墳丘100m以上の超大型墳は登場しない。このことから、同流域では、多くの中小集団が混在し拮抗した政治情勢であったことが推測され、むしろ大淀川流域の生日古墳群や小丸川流域の持田・川南古墳群の被葬者が優勢であったと考えられる。

### 中期

西都原台地の6つの首長墓系譜を統合するように女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の両墳が登場する。女狭穂塚古墳は墳長約177mの前方後円墳で、大阪府仲津山古墳と同一平面形で、その約6割規模を有し<sup>(3)</sup>、出土する埴輪類もそれまで日向地方で採用されなかった畿内通有の技法で製作されている<sup>(4)</sup>。おそらく畿内勢力の強い影響下に築造された古墳であると想定される。

男狭穂塚古墳は墳長167mの日本最大の帆立貝型前方後円墳ないし、造出付円墳で、女狭穂塚古墳と近い時期に築造されている。これら両墳の登場によって、同流域の首長墓の多くは断絶しないし規模の縮小を強いためである。それは日向地方の他流域の首長墓系譜についても同様であるため、両古墳の被葬者が日向地方の首長を統括する盟主的首長になったと考えられる。

しかし両墳の築造後、西都原台地上に前方後円墳が継続して築造されることはなかったようだ。今のところ直後の前方後円墳は、墓域を異にした一つ瀬川左岸流域の児屋根塚古墳・大久保塚古墳の両墳があげられる。これらはその墳丘形態や表採される埴輪が女狭穂塚古墳と類似し、近い時期の築造が予想される。

また、これらの古墳にも継続した古墳が周囲に認められず、5世紀末になって三納川流域に松本塚古墳が登場することから、中期の同流域の政治情勢は非常に不安定であったと推測される。

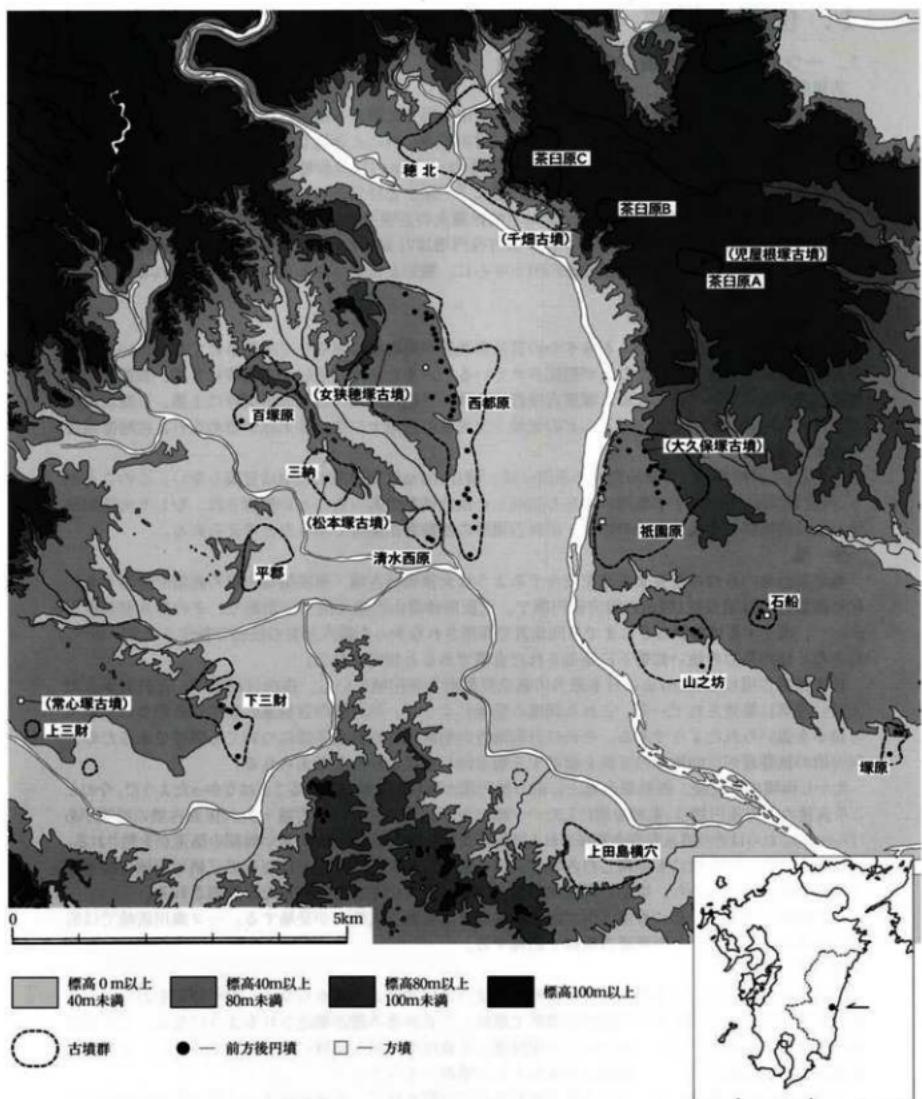
この時期、宮崎平野部にも南九州で顯著な墓制である地下式横穴が登場する。一つ瀬川流域では前方後円墳が築造停止した西都原古墳群で出現する。

### 後期

松本塚古墳築造後、5世紀から6世紀初頭の前方後円墳はよくわからない。やや時期をおいて6世紀前半までには、左岸流域の祇園原古墳群で継続した首長墓系譜が築造されるようになる。この古墳群の概要是のうちに述べるが、おそらく大規模墳と中規模墳が同じ墓域に併行して築造され、互いに階層構造型の群構造を示し、7世紀まで継続する古墳群であろう。

一方、右岸の西都原台地では前方後円墳築造の空白期を経て、6世紀後半に2基の前方後円墳が場所を隔てて造られている。同様に左岸の石船古墳群、塚原古墳群、千畠古墳、三納川流域の清水西原古墳群などで前方後円墳が築造されている。いずれも50~60m規模で、1~2基に終始するため、祇園原古墳群の首長墓系譜には規模・数ともに及ばない。

これら前方後円墳の築造後、各首長墓系譜は墳形を大型の円墳や方墳に変更する。6世紀末から7世紀前半のことである。前者例では西都原古墳群の鬼ノ窟古墳があり、後者に石船古墳群の44号墳、



第1図 一ツ瀬川中流域の古墳群



第2図 票園原古墳群の古墳分布 (1/10,000)

祇園原古墳群の138号墳、常心塚古墳などがある。

その後、列島的に墓制によって身分秩序を表現する時代は終わりを告げるが、流域の首長層がどのように畿内政権を中心とした律令体制の枠組みに参画したか判然としていない。ただ、後に日向国衙や国分寺などが西都原台地に設置されるのは、前期から小首長が混在し、彼らの統括する領域の広かつたことや、女狭穂塚古墳の造営に象徴されるように、畿内政権の影響力が強かったことなどが起因しているのではないだろうか。

## 2. 祇園原古墳群の概要

### 古墳の分布

一つ瀬川左岸台地上にあり、154基の高塚墳がある。その内訳は前方後円墳14基、方墳1基、円墳138基、墳形不明1基であるが、発掘調査で検出された円墳の周溝が38基あるので、その数は現在192基になる<sup>(5)</sup>。古墳分布域は標高70~90mの台地上で、西側直下には一つ瀬川が流れ、東は一段高い台地面になっている。また台地には南北に貫入する2本の谷があり、古墳群はこれら谷地形によって区分されたA~Dの4グループに大別できる。

### Aグループの前方後円墳の築造過程

Aグループは東側傾斜面を南北につらなって築造された12基の前方後円墳を中心とする。前期には、台地北西端部に前方部が低平で後円部径に対して狭長な前方後円墳が2基（187号墳・195号墳）築造されている。その後同形の前方後円墳は継続しないが、5世紀中頃になって大久保塚古墳が造られる。採集される埴輪や墳形は、先述のように西都原古墳群の女狭穂塚古墳や茶臼原古墳群の児屋根塚古墳に類似するため、近接する時期の築造と推測される。5世紀後半には大久保塚古墳に継続する古墳はみあたらぬが、今後の調査で中小規模墳の築造時期がわかれれば、古墳築造の連続性を明らかにできる可能性もある。6世紀になると前方後円墳の築造は爆発的に増加し、墳長60~100mの大型墳と墳長60m以下の中規模墳が築造され、その多くで埴輪が樹立されている。この埴輪の検討から、前者は百足塚古墳→59号墳→弥吾郎塚古墳→68号墳と連続し、後者は水神塚古墳→機織塚古墳→52号墳と連続して築造されたと予想される。これら大規模墳と中規模墳は併行して築造された可能性が高く、古墳群全体としては中小の円墳を含めた階層構成型の群構造であると考えられる<sup>(6)</sup>。

### Bグループの群集墳

B・Cグループは前方後円墳をそれぞれ1基づつ含む後期群集墳である。特にBグループでは場整備とともに調査で36基の消滅墳が検出され、周溝に掘られた二次的埋葬施設と考えられる地下式横穴が5基検出され、近接して4基の馬の埋葬土壌もあった。

これら群集墳の築造は、出土した須恵器を検討すると、TK10型式併行期に始まり、MT85型式をピークに単上りⅡ型式まで継続する<sup>(7)</sup>。

### Cグループの首長墓系譜

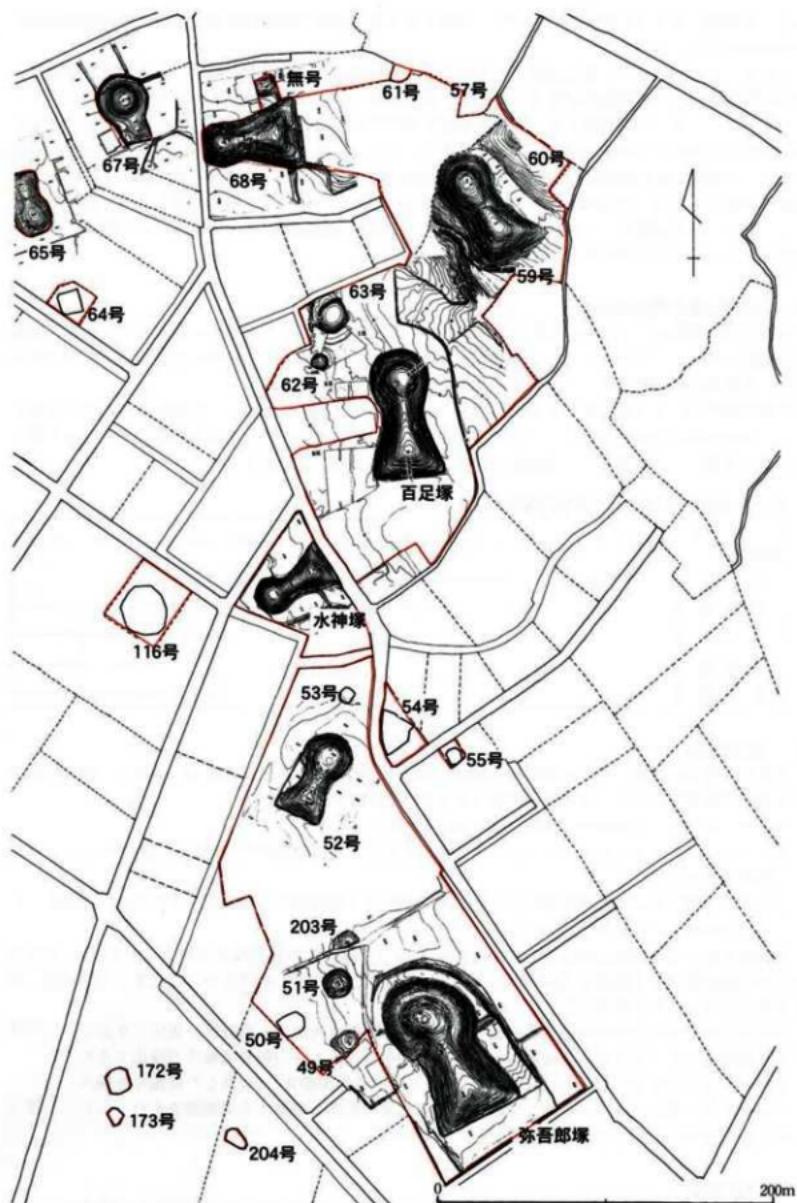
Bグループの霧島塚古墳は時期不明のため詳細不明だが、Cグループは前方後円墳の139号墳のうち、140号墳（円墳）・138号墳（方墳）と続く終末基の一首長墓系譜であり、石船古墳群のように6世紀後半になって派生新出したものと考えられる。祇園原古墳群はこれらの首長墓群を中心に、小円墳が築造され、結果、大古墳群を形成したようだ。

## II. 発掘調査の経緯

### 1. 整備までの経緯

「新田原古墳群」とは児湯郡新富町から西都市右松にかけて分布する古墳群の総称で、昭和19年に指定措置を受けた国指定史跡である。その分布域は東西4.5km、南北4.5kmの台地面から沖積平野部であるが、分布の集中する4つのグループに大別できるため、東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。

このうち石船古墳群は昭和16年の陸軍基地建設の際に消滅したが、他の指定措置をうけた古墳群は町有地として買収されており、管理・保護している。しかし公有化された墳丘は保護対象でありながら



第3図 扱園原古墳群の短期整備計画区域（1／3,000）

らも、その他に存在する埋没した周溝や、古墳を取り巻く築造当時の地形など重要な考古学的情報は十分把握されていない。

このような状況のもと、指定措置から半世紀以上が経過し、建造物が古墳どうしの視界を遮り、農地のは場整備によって旧地形が変化するなど、古墳を取り巻く周辺環境が大きく変化している。

これに対し、町では平成元年度に管理策定書を刊行するなどの施策を実行してきた。また、平成4年度に祇園原古墳群では場整備が計画されたのをきっかけとして、平成7年度から指定地の追加と買収を行い、平成8年度には積極的な史跡の活用を目的に「新田原古墳群史跡整備基本計画書」を策定した。

基本計画としては「古墳の保存整備と同時に畠地のなかに点在する古墳の風景をさらに良好なものとし、歴史と自然が融合した景観整備を行う」とこととし、対象面積が広大であるため、短期・中期・長期からなる30年以上の計画とした<sup>(8)</sup>。

## 2. 短期整備と発掘調査

短期整備の範囲は、「新田原古墳群」のなかでも公有化率が高く、前方後円墳が多く分布する祇園原古墳群Aグループを対象とした。Aグループは墳丘や周溝を含めた古墳間が連続して町有地であるため、見学者の利便性にあった整備がしやすい。

短期整備では、①主要な前方後円墳の復元、②ガイダンス施設の設置、③見学園路の整備を目的とした。整備年次は平成9年度から17年度までの9年間とし、6年間にわたる発掘調査で百足塚古墳と59号墳の基礎データを整理し、墳丘復元やガイダンスでの展示を予定している。

表2 新田原古墳群史跡整備短期計画

年次 事業内容	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度
公 有 化									
発 挖 調 査									
復 元 工 事									
施 設 整 備									
環 境 整 備									

## 3. 調査経過

平成9年度から実施している百足塚古墳は、祇園原古墳群Aグループの中心に位置し、墳丘を含めた土地の公有化率が高く、古墳群を理解する上で、重要な位置にある。

そこで、次のような調査から整備に至る方針を定めた。

①Aグループの中心にありガイダンス予定地にも近接する百足塚古墳の墳丘と周溝を中心とした遺構復元を行う。

②百足塚古墳は県内でも検出例の少ない形象埴輪を有する古墳であるため、その内容を把握し、レプリカ展示などを含めた活用を行う。

平成9年度西側には百足塚古墳に近接する62・63号墳の周溝の位置を把握する調査区（I区）、百足塚古墳後円部西側周溝を確認する調査区（II区）を調査し、それぞれ周溝とそこに転落した埴輪片・弥生中期の住居址3軒を検出した。

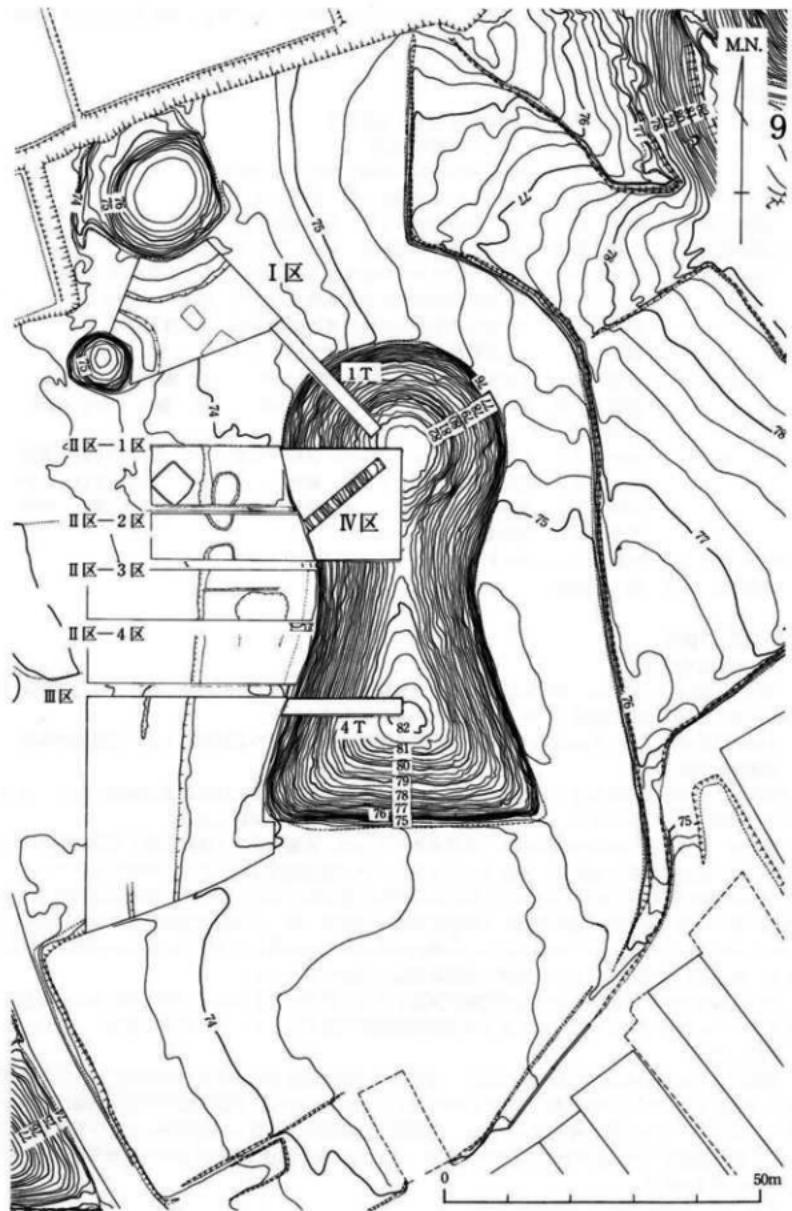
平成10年度には百足塚古墳前方部西側周溝と前方部隅角を検出する調査区（III区）を設定し、周溝と外堤外側からもとともに外堤に配置されていたと推測される大量の形象埴輪片が検出された。

平成11年度にはII区を拡張し、III区までに周溝をすべて発掘調査し、転落した埴輪片を検出した。

平成12年度の調査では、①埴輪片を取り上げた周溝の形状を把握する実測調査を行うこと、②墳丘のうち後円部を中心とした確認調査を行うこととした。

## 4. 調査体制

発掘調査は新富町教育委員会が主体となり、県文化課及び新田原古墳群史跡整備専門整備検討委員会の指導のもと行った。



第4図 百足塚古墳の調査区（1/800）

作業員は地元の方々を中心に、宮崎大学、別府大学、天理大学、奈良大学、東洋大学の学生諸氏の参加を得た。

本年度の調査体制は以下のとおりである。

【発掘調査体制】

○総 括	清 郁雄 (新富町教育委員会教育長) 比江島年見 (同 社会教育課長)
○庶 務	富田 次男 (同 社会教育課長補佐兼社会教育係長)
○調整・調査	杉田 伸子 (同 社会教育課副主幹 庶務担当)
○調査補助員	有馬 義人 (同 社会教育課主事 文化財担当)
○指導・協力	新森 美徳 (同 社会教育課嘱託 埋蔵文化財調査補助員)
○小 田 富士雄 (新田原古墳群史跡整備専門検討委員:福岡大学教授) 柳沢 一男 (新田原古墳群史跡整備専門検討委員:宮崎大学教授) 森本 幸裕 (新田原古墳群史跡整備専門検討委員:大阪府大教授) 飯田 博之 (宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係)	
○参 加 学 生	芝原 知行 (天理大学)、古屋 美樹 (別府大学)、児玉 健作 (奈良大学)、 富田 純 (東洋大学)、松野 圭太、河畠 健一、落合 健一、当房 祐理 (宮崎大学)
○作 業 員	小守 容子、大原 一彦、杉尾美千子、日野 仁美、野尻 富子、滝口 則雄、 滝口恵美子、日野 君代、岩下ヨシ子、新恵トシ子、出井 クニ、江口 栄子、 河野 隆子、寺原 利雄、岩本 栄、甲斐 晴子、上原 咲子、栗野 聖子、 坂本 貞夫、土師美智子

調査に際しては下記の方々にご助言を頂いた。

近藤義郎、杉井 健 (敬称略)

## 5. 調査の概要

### ①百足塚古墳の概要

百足塚古墳は墳長76.4m、後円部径32m、前方部幅43.6m、クビレ部幅38mを測り、前方部をほぼ正南に向け、周囲に盾形周溝を有する2段築成の前方後円墳である。

立地は東西方向にわたる傾斜面で、見かけの墳丘端部はクビレ部の東西で約1mの高低差がある。

### ②調査の概要

昨年度までは周溝内を中心に出土した埴輪片の実測を完了した。本年度は周溝の実測を行い、その形状を確認した。実測はすべて1/20で行い、5cm間隔の等高線を測量した。

昨年度行ったⅡ区拡張区の周溝検出と遺構実測を行った。結果、Ⅱ区とⅢ区を通じて西側周溝・外堤・そして墳丘の端部を全面的に検出することができた。墳丘端部はすでに大半が削平されている。調査前の見かけの墳端から約2m外側にわずかに段差が見られたため、この箇所が墳丘端部である可能性が高い。前方部隅角は擾乱が激しく明瞭な状態ではなかった。本来の前方部隅角は現状の墳端から約3m広がる位置になると予想される。周溝内の墳丘側と外堤側にはそれぞれ大量の埴輪片が検出でき、墳丘側では円筒埴輪が、外堤側では形象埴輪が検出できている。

外堤は幅約6mに及び、一部に溝状遺構が確認できた。墳丘の築造当初には盛土が行われ、外側に溝を掘ったものと予想されるが、2重目の周溝や周堀が完全に巡っていたかどうか判然としない。

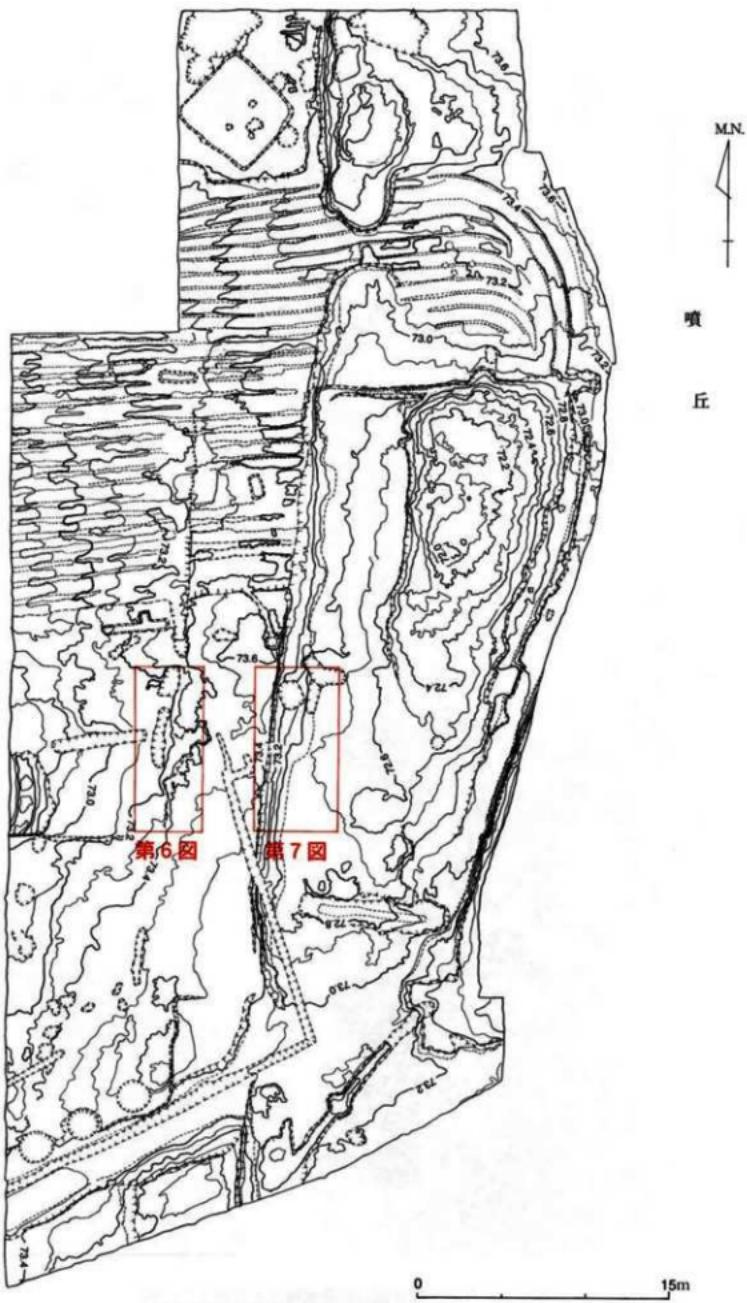
### ③周 溝

周溝はクビレ部附近の墳丘側が最も深く、表土からの深さ約1.5mを測る。周溝底面は、この位置から前方部と後円部、つまり南北方向へ徐々に高くなる形状を示す。周溝最深部の埋土は地山の塊を含み、遺物を含まない堅い層であったため、築造完了当初は均一で整った形であったと予想される。

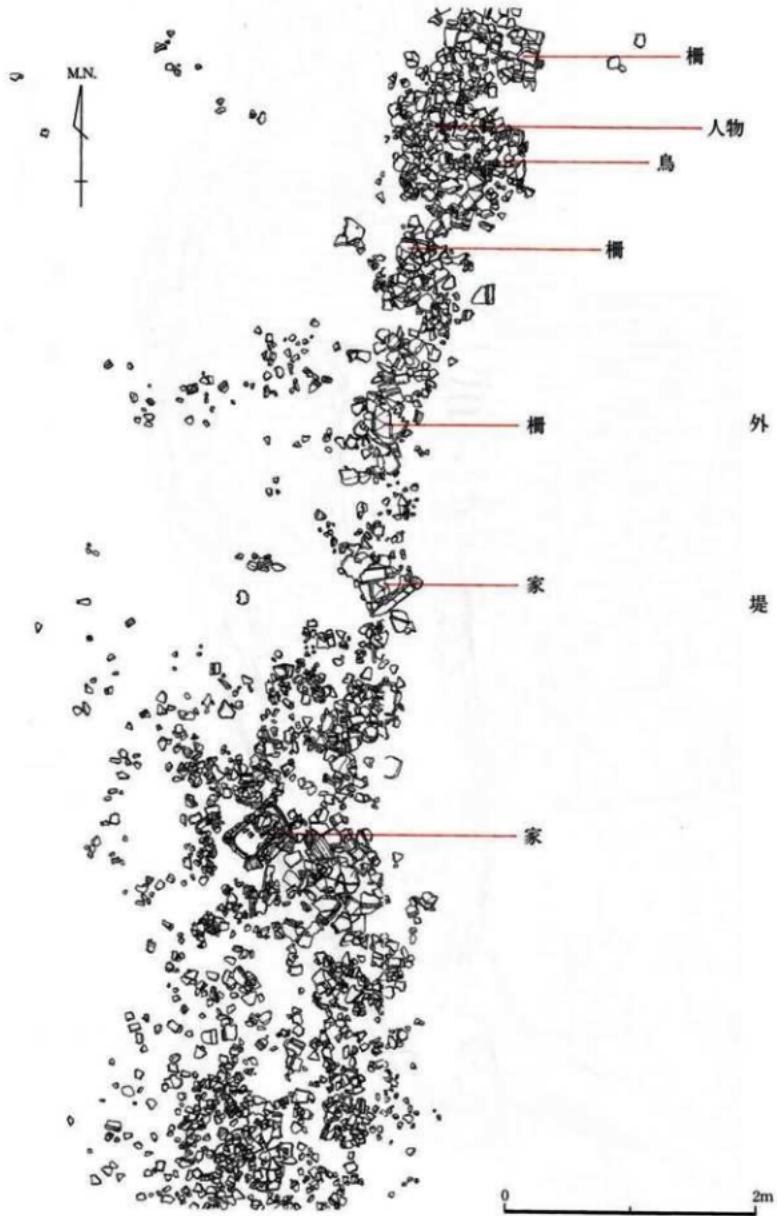
周溝肩部は擾乱されており正確な形状は判然としないが、東側周溝と左右対称になる梯形周溝であったものと考えられる。

### ④外 堤

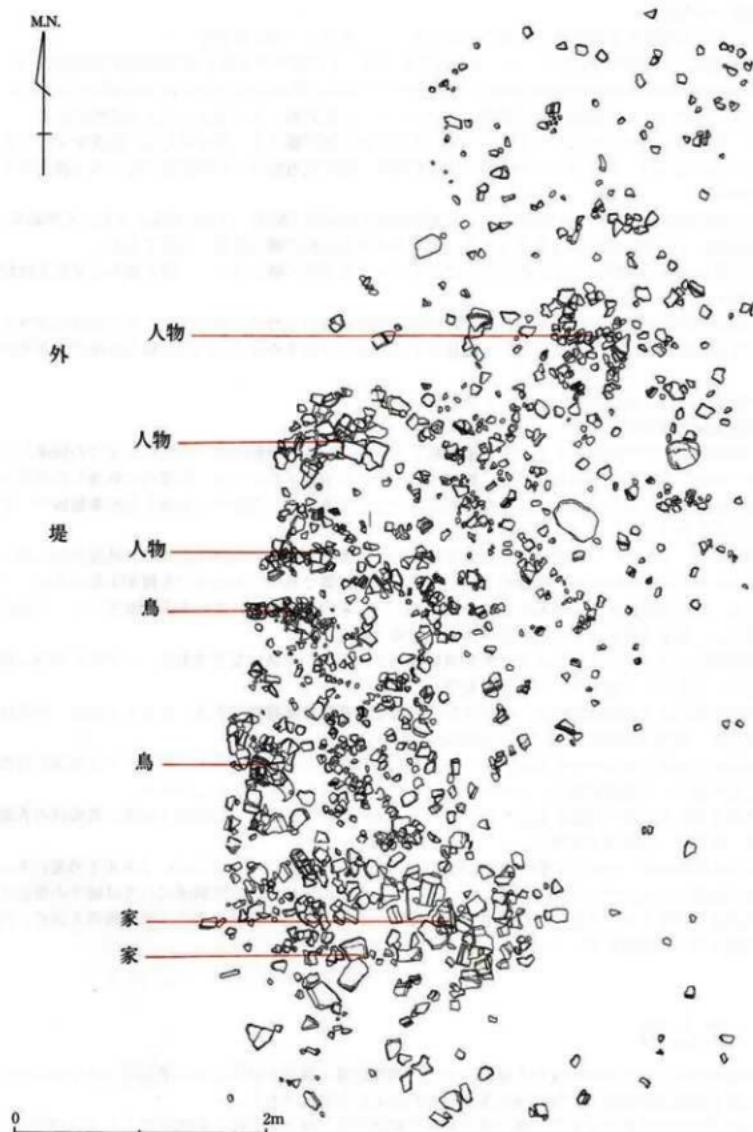
周溝外に外堤があったと想定される。百足塚古墳が築造された場所は西側が低い傾斜面で、墳丘主



第5図 百足塚古墳II・III区調査区 (1/600)



第6図 III区外提外側の形象埴輪出土状態 (1 / 40)



第7図 III区周溝内の形象埴輪出土状態 (1/40)

軸はほぼ南北方向に向く。外堤は今回検出できた箇所では正確な幅がわからないが、埴輪の検出状況と部分的に巡る溝状遺構の存在から、幅約6m程度のものだろうと推測される。

#### ⑤墳丘（後円部）

墳丘の形状を確認する目的で、4本のトレンチ（1～4T）とIV区を設定した。

後円部西側に2m幅で設定したトレンチ（1T）では、2段目テラスからは円筒埴輪列が検出でき、計8本の円筒埴輪底部が墳丘外側に転倒した状態で出土した。墳丘は第2段で深い掘削痕が認められ、高原スコリアと呼ばれる火山灰層が堆積していたため、古代以前に手が加えられた可能性がある。

クビレ部に設定したトレンチ（2T）では、テラス面に礫が集中して検出された。調査中などで詳細は述べられないが、2段目テラスで検出された礫群は横穴式石室の天井部附近に貼られた裏込石の可能性がある。

そこで後円部中心からクビレ部を中心に西南方向90度の範囲（IV区）を調査対象とした。その結果、後円部墳頂に1カ所、前方部墳頂で1カ所、それぞれ円筒埴輪が樹立位置で検出できた。

2Tで認められた礫群はクビレ部を中心にテラスの南北方向へ続いている。礫を固める黄色土は部分的に焼化している。

埋土から埴輪片が検出されており、墳頂に円筒埴輪配列があったことを予想させる。IV区のテラス面からは盾形埴輪が検出されている。2段目のテラス面ではいまのところ円筒埴輪列は確認できていない。

この調査区は次年度継続で調査する予定である。

#### ⑥形象埴輪の整理作業

平成10年度の調査で検出したIII区の形象埴輪を整理している。埴輪はII区からIII区までの周溝と外堤外側から検出できた。形象埴輪は外堤に樹立されていたと予想されたため、周溝内に転落した状況から復元するため1/10で実測した。未だ復元作業が途中であるが、周溝内に転落した形象埴輪の一部の接合状況を確認した。

III区周溝外（第7図）で検出できた形象埴輪は鳥1、家2、柵15、人物1などで、外堤外側に部分的に認められた溝状遺構を中心に検出できた。現在復元作業で判明しただけでも柵が大量にあることがわかる。柵は周溝内の形象埴輪には含まれていない。家の2個体はいずれも入母屋造りで、上屋根を別造りし、輕木を有する。この他形状不明の埴輪もある。

III区周溝内（第8図）で検出できた形象埴輪は鳥3、家3、人物14などである。いずれも外堤に樹立されていたものと予想され、広範囲に転落している。

家には寄棟造りの倉庫風建物と、柱を円柱で表現した高床倉庫建物であり、前者は2個体、後者は1個体ある。前者は輕木を有し、高さは120cmに及ぶ。

鳥は鶴冠を表現したものが2個体、ないものが1個体である。鶴冠があるもののうち1個体には首廻りに毛を逆立てた表現がある。これらはいずれも鶴を表現したものと考えられる。

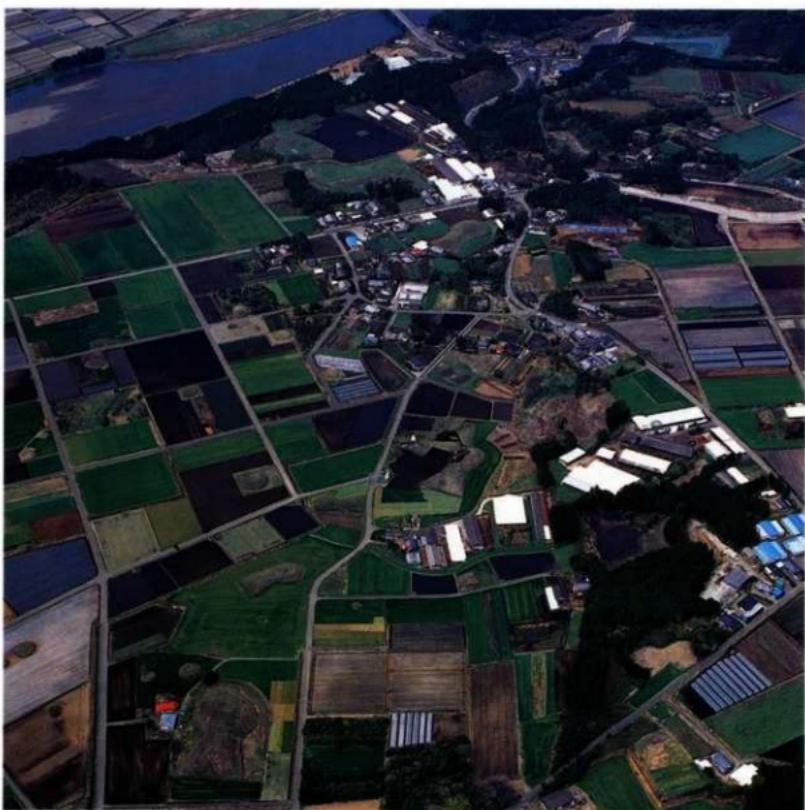
人物は2本足を表現し性器を露出した女性が1個体、桂甲を装着した男性が1個体、製姿状の衣服を着用した女性1個体などがある。

これら形象埴輪がいずれも外堤の左右の周溝や溝状遺構から出土しているため、もともと外堤にあつたものが転落したものであるのは間違いない。さらにその出土状態は自然倒壊にしては破片の散乱する範囲が広すぎるため、人為的に遺棄された可能性が高い。今後の整理作業で、他の箇所も含め、内容と状況をさらに整理していく。

## III.まとめ

本年度の調査では平成10年度から継続してきた西側周溝の確認を終了した。墳端部が削平されていたが、前方部隅角の状況と全体の復元案が得られたものと推測される。

墳丘の調査では西側クビレ部に礫の集中箇所が確認でき、横穴式石室を内部主体とした古墳である可能性が高くなってきた。来年度の調査でその位置を確認していく。



1. 祇園原古墳群（南から）



2. 祇園原古墳群



3. 祇園原古墳群Aグループ（南から）



1. 百足塚古墳（全景）



2. 西側周溝（II・III区）



1. 西側周溝（南西から）



2. 西側の前方部隅角（南から）



3. 後円部へ通じる土橋状造構（北から）



1. 百足塚古墳（全景）



2. 墓丘の調査区（IV区）



3. IV区（北西から）

# 報告書抄録

ふりがな	ぎおんばるこふんぐん4					
書名	祇園原古墳群4					
副書名	国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書(4)					
卷次	4					
シリーズ名	新富町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第32集					
編著者名	有馬 義人					
編集機関	新富町教育委員会					
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地					
発行年月日	2001年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	所 在 地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
百足塚古墳	大字新田字東俣	47	1001	990801 ~000331	2,000m <sup>2</sup>	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
百足塚古墳	古墳	古墳時代	周溝	須恵器・土師器 円筒埴輪・形象埴輪		消滅墳の周溝

新富町文化財調査報告書 第32集

## 祇園原古墳群4

発行年月日 2001年3月  
発 行 宮崎県新富町教育委員会  
印 刷 株印刷センタークロダ